

第 25 期日本学術会議物理学委員会素粒子物理学・原子核物理学分科会（第 1 回）
議事要旨

日 時：令和 3 年 1 月 20 日（水）10：00～12：00

会 場：遠隔会議

出席者：浅井祥仁、飯嶋徹、市川温子、宇川彰、大塚孝治、岡眞、駒宮幸男、櫻井博儀、杉立徹、関口仁子、田村裕和、永江知文、中野貴志、中畑雅行、野尻美保子、山崎泰規、横山広美、山内正則

議題

1. 役員の選出について
2. 議事要旨の提出に関する委員長一任について
3. 分科会委員間のメールアドレス共有について
4. 学術会議と物理学委員会の状況について
5. 学術会議改革に関連した、分野別委員会・分科会等の活動の見直し、および部内を横断した活動について
6. 今期の本分科会の活動方針について
7. その他

資料

1. 素核分科会・物理学委員会名簿
2. 物理学委員長からの報告とお願い
3. 幹事会からのお願い
4. 日本学術会議のより良い役割発揮に向けて（中間報告）

1. 役員の選出について

互選により浅井祥仁氏を委員長に選出した。その後、委員長の推薦にもとづき、田村裕和氏を副委員長、市川温子氏と永江知文氏を幹事として承認した。

2. 議事要旨の提出に関する委員長一任について

議事要旨は委員長に一任することとした。実際は委員の間でメールで回覧して確認したのち、委員長が決定する。

3. 分科会委員間のメールアドレス共有について

分科会委員の間でのメールアドレスの共有を承認した。

4. 学術会議と物理学委員会の状況について

野尻物理学委員長から、今期初めの任命拒否問題とそれを機に生じた学術会議改革に関する経緯と現状について、資料 2, 3, 4 をもとに説明があった。経緯の詳細については、前副委員長の松尾氏と野尻委員長が書いた記事が物理学会誌に掲載される予定であることが紹介された。また、物理学委員会の状況について、川村委員長が辞任し野尻氏が委員長となり、副委員長：腰原伸也氏、幹事：山崎典子氏、田村裕和氏の体制になったことが報告された。

素粒子物理学・原子核物理学分科会については、本分科会世話人の田村氏から、今期のメンバーとして新たに飯嶋氏、中野氏が加わったこと、本分科会から物理学委員会委員として相原氏、浅井氏、市川氏、飯嶋氏、岡氏、永江氏、櫻井氏、山内氏を幹事会に推薦したことが報告された。

5. 学術会議改革に関連した、分野別委員会・分科会等の活動の見直し、および部内を横断した活動について
6. 今期の本分科会の活動方針について

学術会議改革に関連して、分野別委員会・分科会のこれまでの活動を、社会に役立っているか、社会に発信できているか、グローバルな視点で提言しているかといった観点で振り返り、分野別委員会・分科会の必要性や活動の見直しを行うことが求められており、さらに第三部内を横断した新たな活動の提案をすることが求められているため、意見交換を行った。

田村前委員長から、前期までの活動のレビューとして、マスタープラン（MP）への対応、基礎科学研究振興の活動について以下の報告があった。MPについては、素粒子原子核分野はそれぞれしっかりしたコミュニティがあり将来計画を検討・提案しているが、本分科会は公開シンポジウムを開催し両分野間および分野外を含む広い視点で将来計画の議論を行っており、研究分野と社会のつながりを担う学術会議ならではの役目を担っている。基礎科学振興については、個別の分野の利益にとらわれず、基礎科学全体の意義をアピールすべく、基礎科学研究は社会にとってのどんな意義があるかをテーマに物理学委員会主催でシンポジウムを行った。他分野や人文系、マスコミ人を含む講演者により多角的な議論を行い、その内容は書籍として出版された。ある程度社会への発信ができた。

MPについて意見交換を行った。MP重点計画の審査の問題点として、審査の方法の問題（学術会議内の限られた専門外の審査員による短時間の審査で学術的価値が判断できていない）、審査の観点の問題（当初は学術的価値が中心だったが実現性、戦略性等を加えて文科省ロードマップの審査観点と同じになっている）、分野間の調整と選定される計画のレベルの問題（分野ごとに採択数の目安があることで、検討が不十分な計画も分野代表として重点に選ばれること、そのため十分検討された重要な物理の計画が選ばれにくいケースがあること）などが指摘された。一方、MPは分野によっては予算獲得につながり、多様な学術を支援する意義があるとの指摘もあった。学術会議外の専門家も入れて科学的で長期的視点での丁寧な審査をすべしといった改善を申し入れようとの意見が多かった。

物理学委員会と本分科会との関係について議論した。分科会の提案する提言やシンポジウムは物理学委員会の承認が必要とされているため、物理学委員会が分科会の活動を制限する面があり、研究の多様性尊重の観点で懸念がある。しかし、他分野のように分科会に権限を与えて自由に活動させると細分化した各分野のグローバルな視点を欠いた主張が提言やシンポジウムとして出されることとなり、これが現在の学術会議の問題点となっている。物理全体を代表して提言を作るという物理学委員会の役割をきちんと定義し、素核分科会は、基礎科学と長期的視点の重要性を訴えるなどの役割を果たせばよい。こうした意見があった。2月10日の物理学委員会でも議論する。

基礎科学振興の活動について議論した。今期は、国際協力や人材育成に焦点をあてて基礎科学のシンポジウムを他分野と連携して行なってはどうか。基礎科学の重要性ばかり主張するのではなく基礎と応用の垣根を取り払う観点も重要である。我々の分野から出た人材が社会の多様な分野で活躍していることをみせて基礎科学のもつ人材育成の役割と応用分

野とのつながりをアピールしてはどうか。すぐ成果が求められることで短期的視野の研究が増えたため、基礎に根ざした長期的視野で取り組める研究者が育っていないことが日本の研究力低下の一因であり、最も基礎的分野の我々が呼び掛けて、他分野とともに長期的視野をもつ人材の育成の重要性をアピールするとよい。これらの意見があり、こうしたシンポジウムの開催を検討することとした。なお、産業界では博士人材が物理分野で不足していること、企業の中央研究所の衰退が研究力低下につながったこと、といった調査・分析が紹介された。また、野尻委員から、来年の **International year of basic science for development** と関連づけて、基礎研究や長期的視野の重要性に関するシンポジウムを物理学委員会、IUPAP 分科会で考えたいとの意見があった。

なお、当分野に特有の問題として、実験の大規模化による消費電力や費用の増大のため当分野の研究の持続可能性に懸念があるが、最近政府がカーボンニュートラル政策に積極的なこともあり、今後この議論が必要との意見があった。当分科会の中で今後議論する。

第三部の分野横断的な活動の提案について議論した。基礎に根ざし長期的視野をもつ人材を育成する必要性を訴える活動（前述）は、第三部に呼び掛けて進めたい。カーボンニュートラルに関しても他分野から提案があれば参加すべきである。コロナ禍に関連した課題としては、オンライン教育については物理教育研究分科会で物理教育研究の観点から議論が行われているが、当分野で特に経験が豊富なオンラインでの共同研究と広報に関して、第三部の活動があれば協力すべきである。こうした意見があった。

以上の議論を幹事団でまとめて物理学委員会に報告することとなった。物理学委員会では幹事会、第三部に上げる報告書をまとめることとなる。

7. その他

他分野では、分科会で分野の研究内容や将来計画をまとめた文書をつくり記録として残す活動も行われているが、当分科会でもそれが必要かどうかを議論した。各コミュニティがしっかりした文書を作り一般向けのものも公開しているので、分科会の活動としては行わないということになった。

以上